

マルコ 7・1-8,14-15,21-23

イエスのみことばは、それがわたしたちの耳にはどのように厳しく聞こえようとも、そのみことばの前に頭を垂れて真実それを受け入れることが出来るとき、それは、わたしたちに福音の喜びをもたらすみことばとなります。

今日の福音のファリサイ派の人々に向けて語られたみことばも、わたしたちにとってはそのようなイエスの福音のみことばです。これらのみことばを福音として受け止めるためには、ファリサイ派の人々に向けて語られたこれらのみことばを、わたしたち自身のありようを指摘し、裁くみことばとして謙虚な心をもって受け止めなければなりません。福音書の中のイエスのみことばは、どれも、わたしたちのありようを裁くみことばです。何故なら、みことばを聴くとき、わたしたちはイエスが指摘しているとおりの自分自身のありようを認めざるをえないか、イエスが指し示すようには生きられていない自分を認めざるをえないからです。

みことばを聴くとは、イエスがそのみことばによって指摘しているわたしたち自身のありようを謙虚に認め、その先にイエスが示す新しい生き方に向って、イエスに導かれて歩み始めるということです。わたしたちがそのことを受け入れることが出来るとき、イエスのみことばはわたしたちを喜びに満ちた新たな生き方に向けて導く福音のみことばとなるのです。

今日の福音に登場するファリサイ派の人々が、その生き方によって目指した世界は、わたしたちが知らず知らずのうちにその中にとつぷりと浸かって生きている、今もわたしたちを支配している価値基準に基づく世界です。そこでは、昔の人の言い伝えに基づく社会的規範がことの善悪、人の優劣を決定づける規範となります。今のわたしたちを取り巻く状況はもっと深刻で、今のわたしたちの社会の問題はそのような価値基準が崩れ、それに基づく社会的規範が効力を持たなくなってしまっていることに原因があるとわたしたちは心のどこかで思っています。けれども、そのようなわたしたちのうちに、ファリサイ派の人々がその生き方を通して目指した、昔の人の言い伝えに基づく社会規範の再構築としての、掟遵守の社会の実現への郷愁が息づいていることに気がきます。けれども、まさにそのことによって、わたしたちは、ファリサイ派の人々が理想とした生き方に向って再び歩み始めることになってしまいます。昔の人の言い伝えに基づく価値基準と社会規範に基づく掟遵守の理想はそれがいかに妥当なものと思われよとも、イエスがもたらそうとしている福音に基づく生き方から

は遠くかけ離れていることを、今日の福音からわたしたちは学ばなければなりません。

昔の人の言い伝えを重んじて、社会規範としての掟遵守の理想に生きるファリサイ派の人々は、イエスの弟子たちの中に汚れたままの手で、手を洗うことをせずに食事の席に着く者がいるのを見て、「何故、あなたの弟子たちは昔の人たちの言い伝えに従って歩まず、汚れた手で食事をするのか」とイエスに詰問します。このような批判に対するイエスのみことばは、どこまでファリサイ派の人々の心に届いたのでしょうか。今日の福音を聴いたわたしたちの心にどこまで届いているのでしょうか。

イエスはイザヤ預言者のことばを引いて次のように言われています。

「この民は口先でわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。人間の戒めを教えとしておしえ、空しくわたしをあがめている。あなたたちは神の掟を捨て、人間の言い伝えを固く守っている。」

ここに、イエスの目に映っているファリサイ派の人々の姿があります。そして、そのファリサイ派の人々の姿はわたしたちのありようと無縁なものではありません。神の掟がわたしたちの心の深みにまで届かないとき、神の掟の深みがわたしたちの心を揺さぶることを止めるとき、昔の人の言い伝えは、神の掟との繋がりを絶たれ、人間の戒めに過ぎないものとなってしまいます。そしてそれは、人間の戒めであることによって、わたしたちの心の深みにまで届くことはなく、守るべき規律、規則となってしまいます。守るべき規律、規則が必要ないというわけではありません。それが悪いというわけではありません。けれども、人間の戒めに過ぎない規律や規則は、あまりにも表面的な規律、規則であることによって、心の深みに届くことなく、その前で心底わたしたちの頭を垂れさせる力を持ってはいません。それが力を持てば持つほど、表面的な規律や規則は、わたしたちの心に呼びかける神の掟に対してわたしたちの耳を閉ざさせてしまいます。こうして、わたしたちの社会の規範となった人間の戒めは、それを守れるか守れないかの目安となって、神の掟に代わって、人を裁く道具となってしまいます。神の掟を完全に守ってゆこうとする人間の善意から出発したはずの人間の言い伝えを抛りどころとする人間の戒めは、わたしたちの中から、神の掟がそこで働くはずのわたしたちの心の内面を閉ざしてしまうのです。今日の福音のファリサイ派の人々に向けて語られたイエスのみことばは、このようなことを指摘しています。そしてそのみことばは、このような時代を生きるわたしたちの心にも届くはずのみことばです。

神の掟はそれが神の掟であることによって、この世に生きるわたしたち全ての者にそれに従うことを求める普遍的な掟であることによって、その前にすべ

でのわたしたちの頭を垂れさせるものです。誰も神の掟に完全に従うことは出来ません。自分の内面に立ち返って、真実自分を見つめるならば、誰でもそのことに気づくはずです。今日の福音のイエスのみことばは、わたしたちにそこに立ち返るように求めています。

人間の言い伝えに過ぎない人間の戒めは、それを教えるものと教えられる者との間に断絶を生みます。何故なら、今日の福音に登場するファリサイ派の人々の姿勢が示しているように、それを教える者は、教えられた者たちが教えられたことを守っているかどうかには神経を尖らせなければならないからです。そのようにして、人の言い伝えに過ぎない人間の戒めは、教える者と教えられる者との立場を固定化し、その双方に、神の掟の前に頭を垂れて、自らを省みる道を閉ざしてしまうのです。

今日もわたしたちは、神のみ前でそれぞれのありようを振り返り、神のみ前で等しく罪の告白し、赦しを求め合ってこのミサを始めました。主の祈りをともに唱え、神の赦しの恵みの中で互いに赦しあうことができることを祈り求め、神の愛と赦しの秘跡であるご聖体の近づくために、立場の違いを超えて平和の挨拶を交し合います。ここに、イエスがわたしたちを招いておられる世界があります。わたしたち全ての者の神の掟に従いきれない現実を知っておられ、そのようなわたしたちを愛をもって裁き、その裁きを真実受け入れる者たちを、愛の赦しの中に招き入れてくださるイエスの心に少しでも近づくことが出来るよう、このミサをともにおささげしたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高